石井　話がちょっと変りますが、何か近ごろの教育では、記憶よりも頭の働き、思考の問題が大事だといふんですが、頭の中に記憶されたものがなければ、思考活動はあり得ないと思ふんですよ。それを今の教育界では忘れてゐると思ひますね。

鈴木　さうですね。思考の土台となる記憶力がどれほど高く存在するかといふことによって、思考の正しさと、発展していく高さが決定されてくるんだと思ひますね。

石井　コンピューターにしても、やはり記憶装置が豊かでない、つまり小型のものでは、自ら働きも制限されてきますからね。働きの大きい、いろいろな面でよい働きをするコンピューターといふものは、それだけ記憶装置も大きいものに作られてゐるといふ事です。

　それと同じことで、人間の記憶装置に値（あたひ）する大脳皮質といふものは、140 億の細胞があって、今の生理学者の研究によると、その数分の一も使ってゐないといふ状態ですから、もっともっと記憶といふことを考へなくてはいけない時代だと思ふんです。それを僅（わづ）か少量しか蓄積されてゐないものをフルに活用することしか考へないんですね。活用する以前に活用される材料の方を豊富にすることを忘れてゐるのが、今の教育のやうな気がするんです。

鈴木　やっぱり生命活動が、内なる力として記憶されてゐなくてはいけませんね。その記憶再現能力といふものが生かされなくてはならないわけですよ。かういふ意味でも再現する能力といふものを養ふことは必要ですね。

石井　さりですね。記憶といふものは貯（たくは）へておくだけでなく、外に表せなくては記憶されたとは言へませんね。それには常に取り出す練習をしてゐなくてはいけませんね。

鈴木　言葉が全くその通りですね。人の話ばかり聞いてゐたのでは、相手のいふことは解っても、しゃべるといふことがなされなければ、言葉にならないんですね。そのためには繰り返しの訓練といふものが言葉の世界で実に巧（たく）みに行はれてゐるのですね。

石井　私の漢字教育でも、文字をまづ理解させる。それを実際に活用する場面を出来るだけ与へる。さういふ意味で、「漢字〝で学習させる」といふ表現をしてゐるわけなんです。従来の漢字教育ですと、「漢字〝を学習させる」といふことです。この教育では、漢字を学習し、テストでは書けても作文には使はれません。漢字といふものは使

ふためで、覚えるためのものではないといふことなのですが、現実は全く逆ですね。

ですから、漢字を学習の目的としないで、手段として学習活動の中に取り入れる。すると自然に使ふ能力が育っていくわけですね。今は使ふ練習をしないで、ただ機械的にそれを教へる。

鈴木　漢字制限といふ言葉が使はれてゐますが、これは能力制限といふことになってしまひますね。この制限といふ言葉を止めて、必要漢字といふやうに改めないといけませんね。昔は文字の文化の高い成長があったにもかかはらず、今ではろくに字も書けない時代に逆戻(もど)りしてしまってゐますね。能力制限をするといふ事は、観念的に文化を低めていくことだと思ひませんか。

石井　全くその通りですね。文化といふものを、ここまでで終りですよ、と言って区切ってしまふことになりますからね。それではいけません。とにかく子供の能力を高めるためには豊かな文化を用意してやる必要があると思ひます。